

農業農村工学会サマーセミナー2024 活動報告 Report on Summer Seminar in 2024 supported by JSIDRE

○田 崎 小 春*
(TASAKI Koharu)

浅 野 珠 里**
(ASANO Juri)

大 塚 健 太 郎***
(OTSUKA Kentaro)

筏 津 春 花****, *****
(IKADATSU Haruka)

1. はじめに

サマーセミナーとは、農業農村工学を学ぶ学生や若手研究者間の交流の活性化を目的とした学生主催のセミナーである。農業農村工学にかかわるテーマに関する議論やお互いの研究活動の情報交換を主な活動内容としている。1996年の第1回目の開催¹⁾から25回目の開催となった2024年は、9月12日(木)から9月14日(土)の日程で大会講演会会場の弘前大学文教キャンパスにて実施した。本報では、サマーセミナー2024の企画・運営や当日の活動の詳細、本セミナー参加者からの感想、そしてそれらを踏まえた今後の課題について報告する。

2. 企画および運営

本セミナーでは、1日目に参加者同士の交流を深めることを目的としたアイスブレイク、2日目にディスカッション、3日目に対面参加者のみを対象とした現地見学を企画した。ディスカッションでは、「全国のNN学生&社会人とガチ議論！リンゴから始めるNN学習」をメインテーマとし、以下の2つの企画を実施した。

企画1：あなたのおすすめツールは何？研究活動に有用なツールを紹介しあおう。

企画2：リンゴ栽培アイデアコンペティション！～重労働を軽減する技術や仕組みを考えよう～

開催形態は過去2年の開催形式^{2), 3)}を参考に、対面およびオンラインのハイブリット形式とした。セミナーの広報および参加者の募集は学会誌「水土の知」の会告ページ、本セミナーホームページ⁴⁾、農業農村工学会LINE公式アカウントを活用した。また、当学会所属の大学の先生

方や学生会員へ実行委員を通じて直接周知した。

3. サマーセミナー2024 当日の活動報告

本セミナーには、合計26名が参加した。参加者の内訳は対面参加が23名(学生21名、社会人2名)、オンライン参加が3名(すべて学生)であり、12大学および2つの企業から集まった。2日目のディスカッションの様子を図1に示す。ディスカッションは、グループワーク形式で進行し、対面およびオンライン参加者が円滑に議論を進めるため、Web会議サービスのZoom(Zoomビデオコミュニケーションズ)を用い、ブレイクアウトセッション機能などを適宜活用した。また、Googleスライド(Google LLC)を用いて各グループの提案やそれに対する意見を共有した。企画1ではChat GPTをはじめとするAIや文献管理ソフトなど研究に活用できるツールの利用が進んでいる現状を踏まえ、「研究生活全般」および「論文を読む際」に役立つツールについてアイデアや各々の悩みを共有した。グループワークの班を学年や所属の偏りがないように編成したことで、研究に携わり始めたばかりの学部生が大学院生や社会人の意見を参考にしたり、参加者同士が他大学、他組織の研究活動を学んだりする場を提供することができた。企画2では、リンゴ生産が盛んな青森県にちなんで、リンゴ栽培における課題解決をテーマに議論した。はじめに参加者は、リンゴ栽培の作業工程ごとにグループに分かれ、割り振られた工程の作業内容や課題を分析した。その後、リンゴ栽培が重労働であることを踏まえ、議論の結果をもとに重労働

*鹿児島大学大学院連合農学研究科 The United Graduate School of Agricultural Sciences, Kagoshima University, **東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo, ***岐阜大学大学院連合農学研究科 The United Graduate School of Agricultural Science, Gifu University, ****鳥取大学大学院連合農学研究科 The United Graduate School of Agricultural Sciences, Tottori University, *****松江工業高等専門学校, National Institute of Technology, Matsue College

キーワード：サマーセミナー、若手交流

働を軽減する技術や仕組みを提案するアイデアコンペティションを実施した。各グループのプレゼンに対し、聴衆がリアルタイムでコメントやフィードバックを投稿できるように、Google Jamboard (現在は、Google による提供が終了)を活用した(図 2)。コンペ形式としたことで各グループ内の結束が強まり、創造的な議論が行われた。その結果、堅実なものから斬新なものまで多様なアイデアが挙げられた。議論においては、Chat GPT を活用してアイデアを整理し、画像生成機能を利用して視覚化するなど、独自の工夫が繰り広げられた。また、各々の研究テーマに基づく提案も活発に行われた。

4. 参加者の感想と今後の課題

本セミナー終了後、参加者を対象にアンケート調査を実施し、実行委員を含む 22 名から回答を得た。本セミナー全体の満足度に関する質問については 95.5%が「楽しんだ」と回答した。ディスカッションについても 77.2%が「楽しめた、有意義だった」と回答し、「研究に役立つツールに関するディスカッションが非常に参考になった」や「学年を問わず積極的に情報交換が行われ、交流が深まった」という意見が寄せられた。身近な研究生活をテーマに設定したことで、活発な意見交換が生まれ、参加者同士の研究生活に役立つ情報共有ができたと言える。本セミナーを知ったきっかけについては、約 8 割が「所属大学の先生や同僚、知り合いからの紹介」と回答した。参加の理由として最も多かったのは、「知り合いを増やしたかった」で、約 8 割の参加者が回答した。また、「先生に勧められたから」、「友人や同僚が参加するため」と回答した人はともに約 5 割であった。この結果から、実行委員による先生方や知り合いへの周知が最も効果的な広報手段であったことが示唆された。本セミナーに参加してよかったことに関する質問では、95.5%が「知り合いを作ることができた」、81.8%が「参加者同士で交流を楽しめた」、72.7%が「参加者との作業や議論を楽しめた」と回答し、本セミナーを通じて縦と横のつながりを形成できたことに

満足した参加者が多かったことがわかった。一方、自由記述式の感想では、ハイブリット形式における通信環境や音響の課題、議論時のオンライン参加者への配慮の必要性の指摘やフィードワークの導入に関する要望もあった。これらの意見を踏まえ、今後のサマーセミナーでは、より円滑な議論ができる環境整備を進めるとともに、対面参加の魅力をさらに高める企画を検討していく必要がある。そして、農業農村工学を学ぶ学生や若手研究者のつながりを生み出し、今後も継続的に発展していくことが期待される。

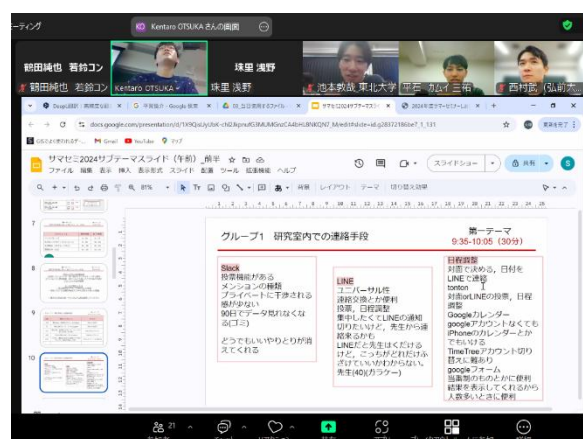


図 1. ディスカッションの様子。

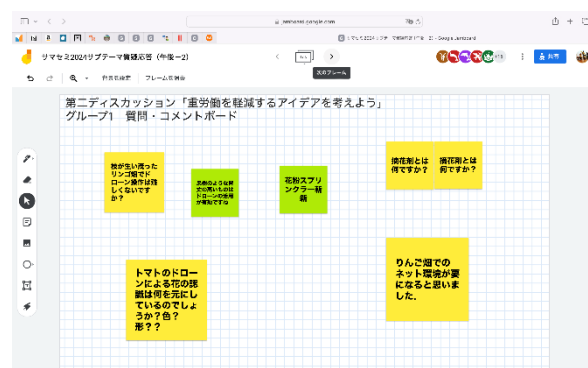


図 2. Google Jamboard を用いた意見交換。

謝辞：農業農村工学会および学会所属の全国の大学の先生方および参加者の皆様にはサマーセミナー2024の開催にあたり多大なるご協力を頂きました。

参考文献：1)中桐(2015), 2015 年度農業農村工学会大会講演会要旨集, pp.54-55., 2)篠津ら(2023), 2022 年度農業農村工学会大会講演会要旨集, pp.818-819., 3)篠津ら(2024) 2023 年度農業農村工学会大会講演会要旨集 pp.843-844., 4) <https://sites.google.com/view/n-n-summer-seminar>.